

佳作

## 夢中になれるって

鹿児島県 鹿児島市立春山小学校五年 和田 結衣

「泳げるようになりたい。水泳を習いたい。」

私は、両親にお願いした。

「よし、がんばれ。その気持ちが大変だぞ。」

父はほほえんだが、母は、

「病院の先生に聞いてみないとね。」

と、少し心配そうだった。

私は、生まれつきアレルギーを持っている。悪化すると、腹痛や頭痛が起き、息が苦しくなることもある。幼い頃から体を動かすことを制限されてきた私にとって、水泳を習うことはとても大きなハードルだったと思う。病院の先生から許可が出たときは両親とハイタッチをして喜んだことを覚えている。

あれから三年が経った。水泳を習い始めた頃は、顔を水につけることもできず、週に一回の練習さえ

も、体がきつくて休むことがたびたびあった。幼児の中に小学生の私が交じる練習はとてもはずかしかった。「はやく進級したい」という思いがあったが、体がついていかず、もどかしい日が続いた。

そんな私を奮い立たせてくれたのは、選手コースでかっこよく泳ぐ友達の存在だった。「私も早くあんなふうになりたい」と思った。治りようを続けながら練習に通った。年月とともに体力がついてきて、休むことも少なくなった。何より、できなかったことができようになること、タイムが伸びて進級できることが本当にうれしかった。

そして、五年生になった今年。各学校の代表選手が競う鹿児島市の水泳記録会があることを知り、私は真っ先に手を挙げた。選考会の後、先生が私の名前を読み上げた時は、とてもうれしくて涙が出そうだった。両親も、

「よかったね。がんばったね。」

と一緒に喜んでくれた。

水泳記録会の当日。母に見送られて鴨池のプールに着いた。大きな電光掲示板、広い観客席に囲まれ、テレビで見るとような景色だった。きん張がますます高まっていった。五十メートル自由形。私が出場す

る種目が始まる。私は、六組目の七コースだ。笛の合図で水の中に入り、スタートの合図を待った。レースが始まった。今まで支えてくれた両親、泳ぎを教えてくれたコーチや先生方に感謝しながら一生懸命泳いだ。気がつくとき、目の前にゴールのタッチ板があった。すぐに振り返り電光掲示板を見つめた。すると、私の名前の横に「一」がかがやいていた。だが、目標の入賞は果たせなかった。表彰台を見ると、選手コースの友達が立っていた。今、あの友達と同じ会場にいられる喜びがこみ上げてきた。同時に、私も表彰台上がりたいと思った。

これからも、限られた時間で集中して、フォームの改善点や足りないところを意識して練習に取り組んでいこうと思った。

「がんばったね。」

と母が笑顔で迎えてくれた。将来は、金メダルをとって、両親の首にかけてあげたい。